



抑うつ症状の軽減に伴い認知機能障害が改善した症例 —興味関心チェックリストを用いた介入—

下村理夏 木村直広 若村陽香 宮脇涉 山中京子

愛宕病院分院リハビリテーション科

Key Word: 抑うつ, 認知機能障害, 興味関心チェックリスト

【はじめに】

今回、抑うつ症状により、日常生活に支障をきたしていた症例に対して、興味関心チェックリストの評価に基づいた介入および余暇時間の調整を行った。結果、抑うつ症状の軽減に伴い、顕著な認知機能障害やBPSDの改善を認めたので報告する。なお、本発表については、本人および家族に紙面にて同意を得ている。

【症例紹介】

症例は、尿路感染後廃用症候群と診断された90歳代の女性である。既往歴としては横紋筋融解症・高血圧等を呈していた。入院前は自宅で1人で生活しており、抑うつ症状（30歳頃に発症して今までに入退院を繰り返していた）および物盗られ妄想等の認知症様症状を認めていた。なお、入院前から服用していた抗うつ薬については、当院入院時から退院時までに服薬の変更はなかった。

身体機能はバランス障害を認めた（FBSは36/56点）ものの、筋力はMMT4～5レベルであり、移乗動作や移動動作は支持物や歩行補助具等を用いて概ね自立していた。また、排泄動作もポータブルトイレを用いて自立しており、日常生活の多くの動作は自立であった。しかし、病棟生活では離床や運動に対しては消極的であり、日中は寝てばかりの生活を送っていた。

認知機能および精神機能はMMSEは21/30点であった。GDSは11/15点であり、抑うつ状態であった。Dementia Behavior Disturbance Scale短縮版（DBD-13）は7/52点であり、日常的な物事に関心を示さない/昼間寝てばかりいる等の意欲に起因するBPSDおよび物盗られ妄想等のBPSDが顕著であった。また、同室者に服を盗まれた等の物盗られ妄想も頻度は少ないものの認める状態であった。QOL評価票（quality of life-dementia）短縮版（short QOL-D）は20/36点であった。

【病態解釈】

本症例は、入院前からの認知機能障害による物盗られ妄想等により、日常生活に支障を来していた。加えて、抑うつ症状の合併により、様々な活動に対する興味や関心が低下している状態であった。

【介入】

作業療法介入時は、離床や運動に対して消極的であり、作業療法への参加を拒否することも頻回にあった。しかし、本症例は好きな歌手の歌を聞くことには関心が高く、作業療法の参加の動機付けとしては有効であった。そこで、興味関心チェックリストを用いて本人の興味や関心のある活動を抽出して、抽出された書字・学習・編み物・音楽等の活動を作業療法介入4週目から実施した。

作業療法介入8週目から、介入に実施していたすべての活動を病棟生活における余暇時間に段階的に実施できるように調節した。なお、介入開始時からすべての期間で、筋力練習、バランス練習、各種の日常生活動作練習を実施した。

【結果】

作業療法介入の12週目の身体機能では、バランス障害の指標であるFBSでは53/56点となり、改善を認めた。認知機能および精神機能では、GDSは段階的に軽減していく、介入8週目には6/15点、介入12週目には3/15点となった。それに伴い、MMSEのスコアも介入8週目には26/30点、介入12週目には29/30点と段階的に向上した。また、DBD-13は3/52点となり、日常的な物事に関心を示さない/昼間寝てばかりいる等の意欲に起因するBPSDが軽減した。入院時に認めていた物盗られ妄想も改善された。short QOL-Dは26/36点となり、能動的な他者交流や趣味活動に取り組む時間が増加した。

【考察】

非薬物療法を工夫することによって、十分に抑うつ症状を軽減できることが示唆された。また、抑うつ症状を軽減させる一因となった本人の取り組みやすい活動の抽出には興味関心チェックリストが有用な方法となった。本症例のような治る認知症と位置付けられている仮性認知症は早期に検出して、早期に介入することが重要であったと考える。

